

96 誌上発表

『医心方』におけるいわゆる
「経外奇穴」について

橋本 史代

日本鍼灸研究会

「奇穴」という言葉は、明の董宿著『奇效良方』に初出する。現行では、十四経の外にある穴、すなわち経脈の影響下から離れた「経外奇穴」というニュアンスが強い。しかし、そうした概念が形成されたのは明代以降であり、〈「正穴」(十四経に属する穴)ではない穴〉(仮称「経外奇穴」)を歴史的な観点から解明するには、現行の概念が成立する以前の文献調査が必要である。

筆者は第115・116回本学会学術大会で、唐代前期の代表的な医学全書である孫思邈著『千金方』(以下『千金』)と、唐代中期の医学全書である王燾著『外台秘要方』(以下『外台』)を対象に調査を行った。「経外奇穴」に関する記述は、全体で『千金』313箇所、『外台』196箇所に見られ、両書とも、穴数は足部、手部、頭面部に多い(特に手足部の穴は、病が発現する場所から遠隔部の治療穴として頻出)。「正穴」「経外奇穴」の区別が曖昧で、判然としない内容の記述も多数見られる。『外台』中の「経外奇穴」は、『千金』からの援用が最多であるものの、比較すると穴のパラエティが少ない。縄や竹等を用いた取穴法のみ、『千金』15に対し『外台』は24と全体数の割合では多めという特徴以外、『外台』の方が控えめな採録数である。『千金』から『外台』の間に、条文がある程度整理、取捨選択された可能性があると考えられる。

さらなる考察を進めるため、今回は丹波康頼著『医心方』の調査検討を行った。本書は、984年に朝廷に献上された日本最古の医学全書で、佚亡した唐以前の中国医薬書が多数引用されている貴重な資料である。検討では、前回と同様に「経外奇穴」の条件を、『甲乙経』『銅人腧穴鍼灸図経』『十四経発揮』中の正穴とは取穴部位の異なる穴とする(穴名の有無には関わらない)。なお「灸少陽」や「灸手太陰」のように、経脈名と見られる記述も一括して穴名として扱う。

調査の結果、全体で153箇所に「経外奇穴」の記述が見られた(鍼法が4箇所、残りは灸法)。そのうち、A:穴名及び取穴部位が記載されるものが17箇所(11%)、B:穴名のみであるが正穴以外の穴と判断されるものが10箇所(7%)、C:取穴部位のみが126箇所であった(82%)。『千金』(A:28%、B:20%、C:52%)、『外台』(A:7%、B:19%、C:74%)と比較すると、『医心方』では穴名の記載がさらに減っている。鍼法の割合は、『千金』19%、『外台』12%に比して3%弱と少ない。経脈名を穴名としたものは3%強で、やはり『千金』19%、『外台』15%とは差がある。

部位別の分類は、足部38、胸脇部24、手部18、腹部17、項背部15、頭面部11、腰尻部9、陰部9、脚部5、臂腕部2、不明5であった。ここでの『千金』『外台』との違いは、手部と項背部が少なめで、かつ胸脇部・腹部が割合として多いことである。

病門(病證)別は、小児病17、風證15、卒死14、七竅病14、上焦病(咳嗽、胃反など)12、四肢転筋(脚気も含む)12、中焦病(疝、水腫、黄疸など)11、陰病11、霍乱11、大小便疾10、腰痛9、婦人6、癰疽(瘡、癭、水毒なども含む)5、心腹胸脇痛3、虚勞骨蒸3であった。両書と比べると、七竅病が上位に見られた。引用文献は20種であり、そのうち、『千金方』(43箇所)と『葛氏方』(49箇所)からの引用が60%を占める。

『鍼灸医学大辞典』(医歯薬出版株式会社、2012年)によれば、『医心方』の鍼灸の特徴として、灸法中心であること、背部と手部よりも腹部と足部の孔穴が多用されていること、経脈に対して否定的であることが挙げられている。これらの特徴は、「経外奇穴」だけに絞った今調査の結果からも顕著に見て取れる。そこには、鍼灸全体の歴史的変遷の縮図があるように感じられ、興味深い。今後も調査対象を広げ、孔穴と五蔵・経脈の関係性を探求する一助としたい。